

## 特殊教育の父・野杉春男先生

北九州のペスクロッチといわれ、特殊学級教育に半生を捧げた野杉春男氏。飛行機事故のため志なかばで倒れた氏と、その教え子たちとの魂の触れ合いを通して、教育の大切さ、愛の尊さを描く感動作。

「もともと地上に道はない、みんなが歩けば道になる」を信念とする野杉春男は、自ら進んで小倉市立三郎丸小学校特殊学級の担任となる。

言葉では言い表わせぬ差別と世間の冷たい眼をよそに、愛し合い、かばい合いながら育っていく子供たちを見るにつけ、この子らこそ、本当に優しい、傷つきやすい子供たちなのだ知り、読み書きから下の世話まで、献身的に子供たちのめんどうをみる。

時には、自らが偽善者ではないか、とも思い悩みながらも、子供たちに暮われ、愛される野杉は、次々と新しい世界を切り拓いていく。

算数の時間には、指揮棒で時計を叩き、その数で時間の見かたを

教えた。自転車の荷台に子供を乗せ、街の看板の字を教えていた時のこと、通りの角を曲がったとたん自転車が大きく揺れ、荷台の子供が落ちそうになった。すると、そこにあった看板を指さし、「危険」の字を文字通り教えた。こうして、教育効果は着々と上がっていった。

“親こそ最良の教師”を旨とし、生死をかけて教育に情熱を注ぎ、親の愛情と周囲の理解を求める野杉。それに呼応するように、子供たちも明るく育っていった。

動物を愛し、競争馬の世話の仕事に意欲を持つ知恵遅れの子供や、幼稚園の徒競争で転倒した女の子を抱き起こす競争相手の男の子など、我が身をかえりみず相手の世話をやく子供たちの純真な優しさや明るさが、次第に周囲の共感を呼び起こしていく。

そんな折、重複障害児教育の調査研究のためヨーロッパに出かけた野杉は、モスクワ郊外での航空機墜落事故のため、ついに還らぬ人となってしまった。

ようやく世間の人にも理解を示し始め、特殊教育も軌道に乗り始めた矢先の悲劇だった。

絶望と悲しみのどん底に突き落とされながらも、野杉の遺志を継ぐ

べく、残された者は、より一層の特殊教育の前進を、お互いの胸に誓い合うのであった。

以上が『春男の翔んだ空』の大体のあらすじですが、映像のすみずみから、特殊学級を育て、特殊教育の父と慕われた野杉春男の足音が、今もはっきりと聞こえてきます。

それでは、この映画を創った山田典吾監督の略歴を紹介しておきましょう。

**山田典吾** 大正5年東京神田に生まれ、開成中学から、日大芸術科へ進む。田中栄三氏の「<sup>どくろ</sup>髑髏の舞」等に感激し、内弟子となる。田中監督の下で沢村兄弟プロの「少年忠臣蔵」や「橋本左内」などの助監督を経て、昭和11年PCLに入社。戦後第一協団を結成、昭和26年に吉村公三郎、新藤兼人氏らと近代映画協会を設立、新藤監督の「原爆の子」その他の作品にプロデューサーとして力を尽くすかたわら、27年に自らの手で現代プロダクションを創立し、「蟹工船」「夜の鼓」、今井正の「真昼の暗黒」などの名作を手がけて、独立プロ陣営の旗手として活躍中。代表作に「ベトナム平和へのたたかい」「告別」「日本大学」「太陽の詩」「春男の翔んだ空」等がある。最近では「はだしのゲン・ひろしまのたたかい」が上映され、話題を呼んだ。